漢保安仙志文

二

西屋の中月録

一 聚んのおさてを云事 付り小女仕る

一 自家の善悪ハ婦人乃心能と悪敷とにあるる

一 能敷墨をよくにする事 付り我慢悔無き事

一 猫ぢらぬ事 付り除舟云けを云乃る

一 焼地扇なゞめよづさみもんをのる

一 る鶯のる 付り女ハにのやを西ぬといふる

一 父母并夫の小袖自分縫る 付り上様べ下をこゝろる

一 文王后妃ちををせ給ふ事

一 人を咤によ和る 付り男女差別ハ事

一 女教ゆく笑ふる 付り楊貴妃の事

一 女一夫ハ 付り宰相高乃事

ふかくおぼくれといふす

一 ゐる女ハむさとワるゝ男に対面せぬるす 付り 乳母めす

起ものゐまにあるこす 付り 東寝す 付り 亀山殿ハ家中女貞女のす

一 壁のいとゐにゐ仕をおもとして物語めす

一 四季ゐゐ人用ゐるす 付り 松山休みめす 五 恋物語のす

一 琴琵琶笛三味線尺八くこう 盲目ゐ乃紀といふす

一 ワるゝ女のおりもでハようらぬとゑす 付り 八卦占ゐのす

一 人よ者伝ゐるす 付り 末摘花乃す

四乃文の中

只業度もやうゝハこゐゐまくゐまりなく武

指よおよすげくゐそごゐせゐゐひゐへハ何ゐにゐゐせ

ゐゐふゐゐゐん歩くゐむゐぬゐ寄ゐるんどあいら

しくゐるゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

ゐゐてゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

ゐゐゐ

とうまてしらんうしぬすまてしんばりあんどをさしぬ
とそのうへ四月のかうべりれをうへはんむとつまてが
大さこハちうしんがいるもあるくおりうに花菱星の
やうにおりまして〳〵ハ何ともいいぬものまくひぎれ
どもまこたのまうにて不用めれうもあるくしんぎる
なまこびわゝと讓ばとて俵をもげをうもうりてぬ
加勢にするものまて徐ち戒場物点ハ泳あ
くるまこび進退ぬりでに浮〳〵せおりて四〳〵
はゝに揺ちくハたせ給ひ〳〵て是ハ宅れ
和城つぐめまでさきこるまでゆんまでとおりひ
てしぎうあさこちうあるおてはぜ又こうるものハ
又ぬうかしてなぬおこうりをうるものまてこれ

それうまでわるぬすまうまをあうしんぎ舟の表ハ
中のこうみのさに〳〵ちう給ひしゝ白文にく
させたまひしゝとうまあるうあ菊白文中れ表ハ
うこ〳〵ちうせ給ひしゝうば舟と奥ちう浦丁扇
風のうし給にくさせ給ふ文扇風と出給んじて
ちうぎやけうえなるぬ下のさてやうやこのこまふ
てちうくとうこせ給へばうくあれ白ひちうえる
ぎうこけうまにうれすにうれさせ給へば人みこお
ぼして扇風のおめれあるうちのぞさせ給ふ舟ハか
こみくちれまの風いるへこたちうるればうそのひ
又ふる人みこちうこ給給ぎず文にうこありて丁
のひうり風へくといきむとちう給ふに人をうれちうに

女房とうぢーふんとりあつまりて扇をりて世をすごしをり
とくとくけちらせ給ふいとひとうげくげとくしん
とんかとおりくくつまをのひつるしてな
をくりけそうぢちくいとおしくておほうつまてう
きしいはつあしせ給ふまうりそもてうぢ宮に
かちらせ給ふくちらこはねの化におうつれていづこ
もあくうせ給ふたちもとえのさてろあまもおを
うくくふんあまずれとおりむ給ふれんれおこうりもを
いでうるのまてうくはの上はんあくうりもり
ぢくはえ給らあるぢうれと給のあくくつまえ
秋のおぐされ殿のにみぢれあるとうげを給ふてお
りうどてちくおうを給ひ殿のれまくとなが光さをあ

まふに夕雲のたねつくおりひ給ひつるに光
殿里のうつもにはの上の方乃殿ふとむうを給ふ
のおとぐはあうをうてまうを坊給へぐーやりりとおど
てさーけまてうを給へぐうくはちらにうを給そ
めくたを髪のもの未もうくとこばをてたをりあく
白こうぐはうすうぐいてほそうふたけはあくあ
のうつうさを楊うもたくはうまうりと源氏のう
まひーもあうつれ接母ぐう我むーねを彼神に
と申うを光ーくれをうるもうをれさを給ふにはん
ちうをうを光ーくれの殿ふうるれ方うまはの人あ
と光ーくれ内にいうを給ふとうそうくてくはうまでう
はの若は源氏一紀乃賢女というをくくうまはの威儀お

りく盛るくんをづけ是おそれくいひまくべき人
もかくづり用ゐこうくんぐにとんゆるみはをる和
ありそのなまりの人をやくくは分にあるを世おり
まして四ん月ゆるを世ひ毎ごて焼物の方着せむ
ともいさを世ふかともふれうはうそくやづ
らになりまれまこと白ひとをあを世ふかとを
ちみうをるりうはわまりにぞ物ぐりまいるた
今の世の雪とやくんはいやくくぞをくなく是
を世載度もわぎを世ふくはひのうりうはとと
つまくまこうゆるるをいゆきわざにおぼこそおぼ
忘をれ扶けやうに雪く二三にまけくのとす式
まれるとおぼえはおくにまそうくのこれ

とこうはいちもこそ弱ぐくんどもるりとにをうはまこい
やくくはいはずやむりそ口はやをまぬと今は女はざとし
しぐなるはりにやさひぬはまみどるといよ似ゆるう
におぼこそいやくくこうくをこれ方はわうを世ふた
あまりと把とはまりまぐきをくくくんおりくごくまる
とこれ迷まをちもれは衣はみづらぬは世おはしまし
うくくみをくくいさづに雪を世ふくば我は分ひとう
なをび扶くやにさむくはどもおりとうまでそれまう
ひくこをちげをとれふるをくせはくくしをおうくこれ。

文王の后ハみづから機をおり紡ぎひ蠶をうゑ絲をとり
ようゐを給ふ人ちからもけさをりうるこハ世をうゑくバ
今ハあまをとりてこゝ人をらバせ給ふとうゑくバ
まく嘲せをみまゝくしゐ余而に賢人をもとうんるまバ
やうゐんまくゝゐたうせ給ふとせハくゝうゑ
うゝさいゝだまゝ習ひて招やうになるりのまくと
バそのあうひうゝ女ごゝちなつまりてハ琴をあくわ
らゝどバいらゝとおぼゐまれをまくゝをれゝ人の
ゝへまうりて形ゝバおりゐに婦人なりとをもうで
うゝくまくかゝうまうくくゝひさしゝふハうら
びのこうゐやあるゝうゝさなゝうんおゝさゝおゝてゝて
ゝ思やうにるゝゐ〳〵むハいゝ世羽あるゐまくゝをゝう

ゝに賢妃と云后いまそうゝゝ一度忘めバ敵ハ次
とうゝゐゝまをはゝうゝてゝをゝうゝそれもまをに賢ハバそ
ゝおりゝれゝさゐまゝてあまゝとに強弩ゐ口なゝハ
ゐまくゝぞいつをにゝやうゐまハいゝゝさゐゝゐくゝ
どゝ琴をくふゝゝてゐまゝとバりれをゝばけう
ゝのゐゝみふゝばゐまくゝゝちゝとバりれをゝばけう
つゝくゝゝゝ婦人ひうゝ給上れ一の姫をゝゝゐ
ゝゝゝゝゝゝハおぼくゝさひゝハぬが六月朔日に厳
寒ゝゝ氷をゝくゝまつゝに宰相の扇として蓋中
納言のおりむぐゝゝゝゝがゝりゝとうをゝとゝてゝたゝう紙
ハゝのせ芳がゝゝさをゝまゝれを孫文ゝをゝあつゝ芳がゝ
さハとゝてゝさゝげゝてゝまつゝらゝをゝにむつゝゝをせた

まゝと宰相殿ゑをもるさせおくべたゝかごしらのにたの
ゆをもくゝりて在るゝにあつきわるまゝ水とけくしづく
のとをうこゝりまるゝに之のこまゝハいかりてゝど都
のとをくむつしまふくゝたにおうかゝ宰相あつ
ゑしさにくゝもうゝ忍ふゝそのつぐくの女ハ見に
をうゝらにいでたなんどしもんゝりしゝゝ宮ハ
寝にれゝもれゆゝをなつさゆゝごゝをもゝもむつし
くゝえしゝりゝゆゝハよゝらのゝゝゝわゝゝれゝどゝか
きあかりぐたしゝゝゝけゝハゝゝりゝぬなゝ女ゝゝ
わごゝ嫌やうなる女のゝゝゝどゝふゝにたゝゝゝ
すみゝゆゝんゝくゝゝそゝおりゝゝでおりひゝゝんなゝ
なゝてゝやゝごゝくゝにゝやうなるゝゝけゝゝべゝてゝあゝりなら

いあゝごゝハゝの中れ戯雄ゝゝくゝべはんゝをおゝ
りゝゝらん増ゝくゝりゝゝかゝくゝもゝゝゝゝ在ゝふゝゝけ
ゝハたゝゝゝゝのゝゝゝらんゝハゝひゝゝゝむゝゝつゝゝゝれ門
戯ゝゝべゆゝゝにつけゝくゝゝゝけゝゝゝれゝゝのゝゝゝゝゝんふ
て人ゝゝくゝみゝれゝゝるゝゝゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝけ
ふゝゝゝゝれゝあゝゝどゝゝゝくゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うぬぎものにぬぎかうとしてとりかへしたる
まうとくたいめんおうしまつりしのちはやうなれども
てこうこうぬこうあり給ふとうちとくんた
しのなりにめのまへにそびにおり給ふ
うしまこうこうちうるおりとうくしこがこと給ふ
のとぐなうとぬぎけうとうとうるうとさくあ
るしと色こさ面くにくへばんゆうしなくうく
ちうげ給ふて恵に笑やうるにうちうけさ給ふ
ひくこをかはこうとうを給ひうしされどそし
なうけるくわうう殆へとりくはうずこそあに
あんとれ面るうくうづれせうとうちまこはやうを
なるおこうかはうくしうとうるどとうかはうくへ

いまこさを給ふかうこうぬすうて人をとうやうこうとおりふあに
てこそおそ給ふこさをのうこうひうくうこうこのあうこうとうち
うこくしあうれすうとへ給ふるうこうとうやこうあおうこく
こへ神れのあれ家にいう給ふかこうこうしくこうろ
しはうこのうけべるうんどうこうこうこうふこうこうをてあに
の守かうてとうあうてはれにおり給ひうしみれ
人兄のへうんたうこくこそむしう畠山の作業とやうん
とひうくの隠うにさうくうの妻あうこうがいふうこく
みをあうひうんうこうこうとこうこうなるこれをれを
ううこうひて神やにこのびへうこうげふうが彼女房おこうこう
こうこく変こうくうして報をおうすうあうこそおうとう
のうこうはぬうんなうこうぬうこうよこうひうくばはおのこうこう

むしゐもうれたらしくくるあうせたてとてそうせ
ゐるくをれたらなるしれあるまかるふとそれらで桜
におさまるとしかりつひハあなつるにものゐにお
えくさせゐるくをしくをしくをらしくをるせゐ
ゐるとれおふしらのうをるぐれぐいりさひるを
あるまじれとをりとうれるひべさるのわハ四変ハ
わるんうだりこうじてゐゐひるしたのびゆた
とりるどりさせゐるんハなびうせやそれるさを
なりるいるうるこるりるるしわじやるれるけ
せるれるれ付わりそるぞつひハるるくるるるせゐ
ゐよるるそて

みくるまに乗られはおのこらしがかりてなさせ
まくしぞあるずくさやうのとれわやうちなるぐよ
さまくいろぬぞあてそぐをわちあふの奥女こそや
ちどのやうにんうちさくまとせ給ひうまどくは
あやしれをなどまいりてうんよ捧させ給ふを
うちくかとこれ参りのそぐおがうれうは姫
をまくはうじに乗そうにくくのうんべ
はをいぐおばしめすやとそうのをまとさせ給ひ
うしまをも参ふ山の侍ちくうを妻ほうれを
こをはうまくあうを文このれおこ艶書をかようを
てをを女房とりてうくうあうどれうをまうち
うけひそうふかのををんせくはををみちり給ふや

こにあるじ文をとりておどろきを微笑あれ
ぬいふ女房これ大きものめうれるり心微へううて
うち給へとしてを支うれ給へうりとくるりをせうを奏
弾宮殿へ行遊ぶくうのかうれよ扇あひ名のうとけ
てうちうをうを扇山実給ひて歌合の褒美に
行逢ををぬりを書ハ貞女なうをこの心感ありく
けるでん給ひりしとるり扇山家門歌貞女のうは
女子訓もふしくわりうれうハなうまぐをうく
ぐどもうをを人の名さ風ハをうれいやしれり給ふに
筆とをいうとひるぐうハひりうあ事もあるら
ひるをどれりひ出ひまくりさもうをぐまこ後
給なうわいうをも菓子作菓などうく侍四位

母をあつめはなをのちるかしこりくに読に読つゝ
面をれ業のこに婦人さきり始めそひとくゝけるゆ
まくゝぶさやうるうん初に業のぬゝうれつぬぐくして
わたほなをうんとちん為りて寄まぐもうるつゝ髮
ゆくくゝさ儲をのおとゞる丹花れ鬢茎蓉のまか
ぎり業れまるゝよふ神の業なゝのくゝさうたゝみ
ざりあるれぎり潮にあゝれゝうこれゆ松れ潮
ゝをゝいくくなどゆさむゝ幽ゝ折ゝゝをゝ
せ結ゝまゝな成一向ゝ初次にはらゝ儲ゝ
や為あゝるれゝれいひそおり絡くゝもなん業ふ
いゝよいへゝとて天ゝにおくゝ人ゝゝるれゆゝなれわ
ゝ天ゝゝり潮ゝゝれゝゝばゝれゝさゝわゝゝん

あるがゝくゝけゝゝや昔のすれゆれ人ゝゝゝゝわゝさゝ
いゝべけをゝゝるれゆにゝ絡ゝひなゝゝ業井のゝを
よゝゝゝゝにおゝるゝ考くゝのなゝれゝさゝゝゝゝゝゝ
業振ゝにゝけゝれくゝゝゝゝずまゝらゝゝ絡ひゝ
ゝをがゝゝみ結ゝゝゝゝゝゝゝゝ山ゝ梅梅ほゝ絡
ゝくゝゝけやひゝゝゝゝ前ゝる絡出れゝに振て花
の本松にゝゝゝをゝて和れゝもれるゝゝゝかゝゝ絡
ゝがゝをれりひくくに神掘ゝて花月の結却れ業
業みゝれほゝゝゝれ月ゝゝれ一ゝゝもいゝゝゝの絡
ゝゝゝあゝんゝおゝゝゝなゝゝゝゝゝ書ゝ絡れ琴の
ゝゝゝゝゝくゝゝゝゝくゝ業絡ゝひゝ完ゝゝれ名ゝ結
月のゝげゝゝ浪の川れゝゝゝみゝ七ゝゝゝれゝむゝゝる

[illegible]そこなひて秋ごろに屏の[illegible]をなほしそこなひて雲
母さやうふぜいの事まゐらせ[illegible]
[illegible]そこなひくに蔦やうくらうなりひく岩の蔦ふる[illegible]
きさにうすそとうを遣はせひかう
[illegible]けれうこのほかぐさうてうることこへてうの
[illegible]ふもくあくにかに袖わごとぐもしくそれとうをハ
[illegible]のふ後遣ふまでもさすがにそとかう
いでうをもはひくたに侍四人にこまをもてにゐをとうを
はひうし登れうをいるに登すまをはふとをはづら
[illegible]ばんげるれ小れ系毒をこぶそにとをはふてふ
神幕ととくはとはうらふ人ふくもちつくとち
なれ人のうをとりぐとうくまるふべさるうふろのぞめ

ぎうぬれれ小幕うくやをまをきまひうしなと袖
[illegible]たうれはうとうをくなまくくやとうをくもしりく
[illegible]ぐうぞれの[illegible]系れげ寄れ門ままくも人多さふ
[illegible]げをはひうしさうのとうふうをうとうをする
[illegible]ふくくくくふ[illegible]れすわうくふ[illegible]を
[illegible]系のりとくるけもばんふ
[illegible]かまむつくおげうさざる
[illegible]をはひうしそぐちれを
はをれとをあふれもれしさもまうれうくすぐ
てきうれれはあうとれはさうふ人多けもばを[illegible]
さを[illegible]くをとうの[illegible]人もをくなくさむしれとれ
[illegible]しあをこもうをにぎうひ中に[illegible]

ものこゝろぶかくあり
ければ
ふくさにもなかれ中れ
すみもとりとれわれ
ろうさとはろうぶ
になりむしぬハ
三日が間ハ
くろくにむをとれ
むうまくさすがの人
とくもあまりおり
てぐちりしおりひ
ゝも
たくんぞり琴琵琶
ぶくぶくとなりて
ぶくぶくとなりて
ぶくぶくとなりて

物のようれりのハ去ゆくまさるとれとものそそそく
そそくべのハつれれるれバらりらぬあらゆくにあや海
ちハらずちハやりふくバむりづらんのおこりそ
おりくれるくそれ大御弓入てくどもおそれく
ちづざるハ父のおにはあると水ハ母にくれなりたに
くくをやーなつのにわ
くどもおこりをそてくをそこなるさるとれるり
なくバ母をそこあんハかそれどもたのもり母乃
愛にそれバ子母れいまをさうびおふになる
てなるひあくを分をそこなるがどーかの三味線小
ちもなりうたおりよゆくあばをてあるぬまれ
わざにひるをくあるを分をそこなるくバれを

ゆるるやうなる都はるまきどれとおもひれぬるそと
そくさやせバそそひくお撫させ給くとやあくバるみ
ぶ対れにつけくバるひるるにうしーどもぬまを
給くとやそそバらぬぶるるびむーるかくの人の
ひをそこーるハるかるのるりせあるるにどもの
ちるぬ人ハるくなるるにそおりひくなるのもるさ
ぶーれ事をんるくすぬーをれくバ己ゲ出乃む
るにひるをて むゲてるれなるわるくそ幾度も
くそひも人るる郎のるさせ給ひくれにつ分給
ひるーー佛るどくまるでさせ給ふるも殊勝など
りるせ給ふるるまるぶーくゆおくるもおるまを
給ふるなるれる事にそそとふとびさせ給乃

四人の会じを為ひとりまうした女れ御の者ど
たのむるまで行きおのくにくさまにそこに
べておまつぐするそうぬるまくちん参り又
祇園にとうもまづ
うまれの多くそこんうおひをんなやしれるを
はとおりは女れるひてそがとれ人は
るそこそこ人ぐいあるるやた
実いまさを行まいとされあるとひお
つまいうまそげるとらなるうとんと
とんるもとーーなとれくさを行ひく四とる行
はらるさを行ひ海ぐくうるこ有とする
はるるあるるもんけるみおるる行れまもひとん

てけまぐかれるもそばひどもおるのなるものいなか
おそるーーんのこる行の内ところやうにもるとるるぐ
まもひこは粗それるよおるーーぐくりさひくべは大さ
はあーあもそこなのくなるやーれるを多くさ
むくべるこてーくこ
おこそうれを行れるこ
をるるぐはあるまーー
さるこそなるまなる
もあーくをとくべ
四十迄を内ーるこべ
おくくまとれぬるる
れとれるる行ふと

そもそもはづる四倉人山猫などのやうにあらあらしく
くゐ原氏物語と月ゝ人ゝ家撫花はなれ四方より見物
きおとゝぶ蓑衆をおくらるゝ場所ふしたおやうく表
乃ぶらゝ場にかゝりもせ給ひぶ四方もしくつるがかゝる表
と紙ぶ文まを都にあのまゝ給おりまもしゝべお
ゝぶゝもつもせ給ひくゝらゝ表まもこかゝ表ゝゝゝも
うえしくぐもうゝ表あゝあぶづりゝらてくくさ
せ給ふとてくつゝいてもづゝさゝ四ゝゝらゝず
やゝゝゝゝとおゝりゝさゝ人に物をゝゝも給ふとも
ゝゝんつくさを給ひゝしゝゝくゝ蓑母の部言の
うでゝにゝゝ